月桃（げっとう）通信 No16　2019年9月28日

ゴスペルはフェンスを越えて

石原艶子

小さな群よ、恐れるな、あなたがたの父は喜んで神の国を下さる。（ルカ福音書 12：32）

フェンスで囲い隔ての壁で守ることによってしか存在出来ないものが軍事基地である。私達ウチナーの民は戦後74年間この基地と隣り合せに暮してきた。戦後27年間の米国による植民地統治が終り、祖国なる日本に復帰しても、それは基地つき復帰であり何ら変ることはなくむしろ基地は強化された。それは沖縄を捨て石とした歴史そのものであって、それが現在も尚続いている不条理そのものである。沖縄の青い空は米軍の戦闘機の爆音により住民の生活は脅かされ、子供達は「青い空を返して下さい」と慰霊の日の詩の中で毎年、叫び続けている。海はいくつもの軍港が軍事基地に使われて昔の漁民の生活は奪われている。その上基地からの有害物質によって海は汚染され続けている。陸は、軍事基地が広大で豊かな住民の土地を収奪して、人殺しの軍事訓練に使われている。かつて楽しんだ豊かな海浜は基地内にあり、立入禁止である。やんばるの緑豊かな山々の中には、ヘリパッドが造られ、実弾訓練場とされている。海も空も陸も、日本政府と米軍によって支配され続けている。また私達の大切な水道水までもが基地からの有害物質により汚染され、県民の命が脅かされている現実がある。日本の0.6%しかない小さな沖縄に70%の米軍基地が集中している。その上に尚、辺野古、大浦湾の命豊かな海を埋め立て殺してまで新基地を造ろうとしている日本政府を私達は決して許すことが出来ません。本土の人々の多くは沖縄を知らない、無関心である。この座り込みの現場をこそテレビのお茶の間の時間帯に放映してほしいと願っても、政府は沖縄を見える形で伝えないよう意図的に沖縄を見殺しにしています。

★私達は２０１２年１０月から７年間も普天間基地野嵩ゲート前に集い、人殺しのための軍事基地がすべて無くなる日を願い望みつつ夕方６時～７時、ゴスペルを歌い祈り続けている。ゴスペルの歌声はフェンスを越えて、空高く響き、本土の空に世界の空へと広がっていく。私たちの小さな行動は神に導かれて今、ここにあることを毎回実感している。７年も継続していると、それはもはや私達の意志や努力によらず、神のご意志によって存在せしめられていることに気づかされ驚いている。ゴスペルの歌声は空に響き、本土のキリスト者の心に届いて、本土に１２ヶ所のゴスペルを歌う会が生れました。非暴力による平和を実現するための行動のひとつの証だと思います。ゴスペルソング集の中にある平良愛香さん作詞作曲のミルク世チュクラナ、ウチスリティから２番の歌詞を御紹介したいと思います。

♪どんなに遠く思えても必ずその日はくる　どんなに遠く思えても今その日は近づいてる
どんなにむずかしく思えても必ずその日はなる　どんなにむずかしく思えても今その日は近づいてる
泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜こぼう　さまたげるものはない、ミルク世チュクラナ、ウチスリティ
泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜こぼう　新しい世界が生れる、ミルク世チュクラナ、ウチスリティ♪

私たちが人間として共に泣き共に喜ぶときに、そこに新しい世界が生れること、さまたげるものはないと断言している。私たちが目ざす平和をつくる生き方がここにあること、そして平和はそのような私たち一人一人の生き方の中から生れることを歌っています。必ずその日はなる、と希望と励ましを与えられる歌です。私たちはどんなに厳しい闘いの日にも決して人間としてのこの平和をつくる原点を忘れてはならないと思う。私達はフェンスから身を転じて、道路側に向っても歌います。手を振って下さる方もいて励ま

されています。ごくたまに右翼が妨害にくることもありましたが、ゴスペルの祈りはすべての人を包み込み、誰一人傷つけることはありません。この夏、私は三人の孫たちをゴスペルに連れて行き共に歌い共に祈りました。孫たちの心に平和を祈るゴスペルの祈りの種は確実に播かれて、孫たちはこれからも参加したいと言ってくれました。

★辺野古ゲート前座り込み行動は六年目を迎え、現場の光景はずい分変ってきたと思う。以前は機動隊を敵視し、誹謗、罵倒し、激しく力で抵抗することで機動隊の暴力を逆に引き出し、逮捕者が何人も出たり、救急車で運ばれたりと、激しく傷つく現場であった。然し、こんなことは六年も続けることは出来はしない。今はリーダーの方が「ここは非暴力の闘いですから、絶対に機動隊を罵倒することは言わないで下さい。暴力的抵抗はしないように」と言われます。私たちは不屈の精神を内に強く秘めながらも非暴力で闘い続けています。いつでも歌があり、ユーモアがあり無言の内に連帯の絆が結ばれている。座り込む私達を見て、機動隊の彼等は、私たちをいたわってくれるようになった。孫のような沖縄の若者たちを機動隊だからと言って、どうして敵視したり憎んだり出来ようか、彼等はこの現場の歴史の場に共に立つ証人であり、仲間である。彼等が座り込むウチナーの高齢者を見て、その存在を尊く思い尊敬してくれるようなそんな関係を作る現場であってほしいと私は思う。私たちの存在が彼等の心を育て、平和への願いを起こさせてくれるならこの闘いの現場にも人と人との平和を作ることが出来ると私は思っている。何よりも非暴力こそがその命である。確かに機動隊が居なかったら座り込みだけで工事は止められる。ダンプの運転手達が「基地をつくる仕事はしません」と言ってストを起こしたとしたら工事はストップするでしょう。然し、真の敵は闇の世の主権者なる悪魔であって、その悪魔に従う安倍政権であります。そして目には見えない陰でうごめくあらゆる金や権力、覇権争い、死の商人を相手にする戦いであります。民主主義も司法もない沖縄にあって巨大な国家、アメリカと日本政府を相手に23年も闘い続けている民は世界中どこにもありません。どうか本土に住む皆さんお一人お一人、目を覚まし、沖縄を見て下さい。聴いて下さい。無関心は沖縄を差別し、捨て石にしていることと同じです。何故安倍政権の支持率が50%もあるのですか。私たち沖縄は安倍政治を絶対に許しません。憲法９条は絶対に死守しなくてはなりません。この危機的状況の中一体、日本はどこへ行こうとしているのでしょうか。韓日関係を最悪の状態にまでしてしまったのは安倍政権にすべての原因と責任があります。自己反省も出来ない傲慢はやがて打ち砕かれる時がくるでしょう。

★闇が深まれば深まるほど、光もまた一層輝きを増すのが人の世であります。あちらにもこちらにもキラリと輝く星たちが居ます。先日、国連の「気候行動サミット」でスウェーデンの少女グレタ・トゥンベリさん（16）は声を震わせ泣きながら訴えました。「あなたたちを注視している、私たちを失望させる選択をすれば決して許さない。あなたたちは空っぽの言葉で私の夢と子供時代を奪い去った、私たちは絶滅に差し掛かっているのにあなたたちの話すのは金と永遠の経済成長というおとぎ話だけ。」痛烈な言葉を世界の首脳たちは受け止めただろうか。私は思った、もしもグレタさんのような純な魂の若者が国連の場で「辺野古の海は埋め立ててはいけない」と涙をもって訴えたとしたら、首脳たちの心を動かし辺野古新基地中止が実現するかもしれないと。辺野古を変える道は絶対にあるはずだ。

ゴスペルの歌声が闇を動かし、若者達の魂に届き闇を打ち破る行動が生れることを祈りたい。私は生かされて、許される日の限りゴスペルを歌い続けたいと思う。毎月曜、夕日が沈む頃、車の騒音の中にも確かにゴスペルの歌声は力強くきこえている。未来への希望の歌声である。